【第１４６号　二〇一七年　二月　五日発行】

福音の園だより

平成18年度「高年齢者雇用優良事業所　協会会長賞」受賞
平成27年度「介護職員確保・定着の為の優れた取組」表彰

グループホーム・デイサービス介護保険事業者指定
３５０－００１６　埼玉県川越市木野目一八七八番地一
特定非営利活動法人　**福音の園・埼玉　事務局**
☎０４９－２３０－１１１１（FAX２３０－１１１２）

お便り紹介

母の人生を思い出し、生きる努力を

埼玉県よりの表彰、心が元気になられ、おめでとうございます。

母が１０４歳で天寿を全うした2月5日、一年振りに新河岸駅で下車し、新河岸川の土手を歩きました。九十川の土手が見えてきて、福音の園を眼にした時、母が１０年間もお世話になったことを感謝して、心があつくなり、そして“いつくしみ深き”を口遊んでおりました。

昨日は妹達、妻と４人で仙台で墓参りしました。福音の園のスタッフの皆々様に母は、天空はるか彼方からニッコリと感謝していると語り合いました。母の人生を思い出して、生きる努力を心に刻んだ古里、仙台の一日でした。

皆々様に本当にお世話になりましたとお伝え下さいませ。

福音の園スタッフの皆々様へ

２０１６年　２月　７日　Ｓ・Ｓ

理念・方針説明

「役割分担」と前向きに受け入れ、

グループホーム福音の園・川越　ホーム長　杉澤　卓巳

『（福音に基づいた）**希望への支援の実践**』、『**最期まで生き甲斐を支える看取り介護**（看護）**を目指す**』を理念・方針に掲げて１７名の皆様を看取ってきました（本年１月末現在）。「ターミナルケアマニュアル」を作成して「万全な看取り体制」を目指しました。

ところが、「マニュアル通りとは行かず」旅立った後も不安、孤独、寂しさ、罪責感、自責感、無力感に苛さいなまれる と云う精神的なダメージに直面しました。ターミナル期のケアだけでは充分とは言えなかったと気付き、「**死後のグリーフ（悲嘆）ケア**」にまで踏み込む必要に迫られました。そこで２年前**【研修目的：グリーフケアの基本を学び、ターミナル期から死後における介護従事者の仕事**（ケア）**に対する考え方や姿勢**（向き合い方）**を見つめ直す。これにより、家族と職員の精神的サポート体制を構築する】**として、「**ターミナル期及び死後のグリーフケア研修**・全４回（４ヶ月）」を行いました。

※　※　※　※　※

あれから2年、Ｓ・Ｓ様お便りに安堵し慰められました。旅立ち後の精神的なダメージは見受けられなかった――①一年振りに新河岸駅で下車し、新河岸川の土手を歩いた ②福音の園を眼にし、１０年間お世話になったことを感謝した ③「いつくしみ深き」を口遊んだ ④母の人生を思い出し、生きる努力を心に刻んだ ⑤「お便り」下さった――からでした。

Ｓ・Ｓ様ご家族関係者と一〇年間もの長きに亘る「家族と施設」と云う「**つながり**」の中でＳ・Ｓ様の心の軌跡を、園便り誌面から振り返りました。

『週に一回程度、母の様子を見に福音の園に行っておりますが、環境に順応して元気に暮らしている姿に接し、ほのぼのとした喜びとホームの皆さんのご努力に感謝、感謝の素直な気持ちに浸らせていただいております。

他人様に母のお世話をお願いしている「後ろめたさ」に悩んだ時期もございましたが、今は与えられた「役割分担」と受け入れ、日々前向きに過ごしております。

自宅が「安らぎの場所」に戻りました。何年振りのことでしょう。「安らぎ」を感じる時、「安らぎ」を与えていただいた方々に感謝しております。』

（第2号 2005年二月号）。

利用者の後ろに家族がいて、その後ろに地域がある

精神的ダメージの一つ、「後ろめたさ」からすでに解放されておられたのでした。

３年前、埼玉県介護支援専門員協会・研究大会で『**ホームと地域とが「つながる」ために**』と題して当園事業所紹介。これに先立つ第一部は『**地域包括ケアシステムにおける介護支援専門員の役割**』と題する基調講演。講師の厚労省老健局振興課担当氏が、「私から皆様に伝えたい事」として次のように基調講演の最後を結ばれました。一部を紹介いたします。

『◎利用者だけでなく**家族の幸せも介護支援専門員にかかっている。利用者の後ろには家族がいて、その後ろには地域がある。**◎誰もが安心して暮らせる社会は地域が豊かであることが必須の条件である。その意味でも、介護支援専門員は地域をも豊かにする役割の一端を担っていると言える。◎人を支援し地域を豊かにする、そのような**魅力と可能性に満ちた仕事に誇り**を持ってもらいたい。』（平成２６年度 通常総会・基調講演）

来訪歓迎

視察・園芸療法活動風景　　〇〇　〇子様（府中市）

御礼

清掃ボランティア　　〇〇　〇子様（川越市）